第 15 講　近代の合理的精神

1　近代科学の誕生

近代科学とは，キリスト教の権威に基づく価値付けに囚われず，自己の理性を信じ，客観的に考え自然を理解しようとする学問である。また，このような姿勢で主体的に生きる道を問う学問が，近代哲学である。

※近代科学者・哲学者は，自然現象を説明する際，「神の意思」の介入があることは否定したが，キリスト教そのものを否定したわけではなかった。

①コペルニクス（1473 ～ 1543 年，ポーランド）

世界を支配しているのは神，という信念はもったまま，カトリック教会が公認するプトレマイオス（２世紀，ギリシャ）の**天動説を否定**し，太陽の周囲を地球が回っているとする**地動説を提唱**して『**天体〔天球〕の回転について**』を著した。

②ガリレオ = ガリレイ（1564 ～ 1642 年，イタリア）

望遠鏡による天体観測の結果，宇宙は神が創造した絶対空間であり，地球はその中を動く惑星だと主張した。そして『**天文対話**（てんもん）』を著してコペルニクスの**地動説を支持**したが，カトリック教会により**宗教裁判**にかけられると，撤回を余儀なくされた。

※ガリレイは退廷時に「それでも地球は動く」とつぶやいたとされるが，これ以後，幽閉されて監視下での生活を送った。

③ケプラー（1571 ～ 1630 年，ドイツ）

天体運動の観測に基づき，惑星が楕円軌道を描いて運動する法則（＝ケプラーの法則）を発見し，コペルニクスの**地動説を支持**した。

④ニュートン（1642 ～ 1727 年，イギリス）

ケプラーの影響を受けて**万有引力**（ばんゆういんりょく）**の法則**を発見，『**プリンキピア**〔自然哲学の数学的原理〕』を著した。

以上の４名に共通するのは，キリスト教への信仰心をもってはいたが，その教義に囚われず自然と向き合い，その姿を解明しようとしたことである。彼らは，自然の真理に迫るために仮説を立て，観測・観察に基づき一定の条件下で実験を繰り返し，法則性を見いだそうとした。このことが**科学〔サイエンス〕**の出発点となった。

〈 ***Note*** 〉

２　イギリス経験論

①フランシス＝ベーコン（1561 ～ 1626 年）

A　人物

絶対王政時代の**イギリス**に高級官僚の子として生まれる。議員を経て法務官僚のトップに昇り詰めたが汚職事件で失脚，以後は著述に専念した。感覚的経験に基づく思考を追及し，古代・中世の自然に対する価値観や学問を否定した最初の知識人。腐敗防止の実験のため雪の日に戸外で鶏の腹に雪を詰め，それがきっかけで肺炎となり 65 歳で死去。主著『**ノヴム＝オルガヌム〔新機関〕**』『ニュー＝アトランティス』。

B　主張

あ　**「知は力なり」**

本来，知識とは生活の向上に役立つものであるべき，と考え，知識は人間の力の源泉であると説いた。

い　**「自然は服従することによってでなければ征服されない」**

知識は自然を支配して活用する力であり，自然法則の発見により獲得できる。しかし，そのためには，謙虚に自然を観察しなければならないとした。

う　**（イギリス）経験論**

先入観や偏見を排除して，自然をありのままに観察する必要性を説き，経験によってのみ得られる事実を最重視した。

え　**４つのイドラ**（＝偏見・先入観・偶像・幻影）

1　**種族のイドラ→**見間違い，聞き間違い，錯覚など

例：「肉眼で見えないから微生物は存在しない」と考える。

2　**洞窟のイドラ→**限られた視野で真実の全体が見えたと思い込む

例：「Ｂ型はマイペース，自分の周囲はそうだから」などの決めつけ。

3　**市場（いちば）のイドラ→**いい加減な話題を真実と思い込む

例：「ネットでこう書かれていたから」という理由で正しいと思い込む。

4　**劇場のイドラ→**伝統や権威を妄信する

例：「代々のしきたりなので意味がある」といった無批判な判断。

お　**帰納法（きのうほう）→**イドラを避け正しい知識を得るための方法

観察や実験から得られた多くの個別的事実を整理し，その中から一般法則を発見しようとする方法。

例：ソクラテスは死んだ，プラトンもアリストテレスも死んだ（＝個別的事実）→ゆえに全ての人間は死ぬ（＝一般法則）

②その他の経験論者

A　**ホッブズ**（1588 〜 1679 年，**イギリス**）

全ての事象は，自然法則に従う物体の機械的な運動として説明できる，と機械論的唯物論を唱えた。

※人間の知識とは，刺激が脳に伝わり生まれる快・不快の感覚が記憶として蓄積されたものであり，人間の意志〔意思〕とは，その経験から快を求めているにすぎない。すなわち，人間は意志を自由に働かせて行動しているわけではなく，経験に由来する外界知識が意志を決定する，と説いた。

B　**ロック**（1632 〜 1704 年，**イギリス**）

著書『人間悟性論』で，本来，人間の心は何も書き込まれていない**白紙〔タブラ＝ラサ〕**のようなものであり，あらゆる観念は経験に基づいて構築されたものであると説いた（＝**生得**（せいとく）**観念〔本有**（ほんゆう）**観念〕の否定**）。

※人間の理性は経験なくしては働き得ないとしてベーコンの経験論を確立，デカルトの合理論を批判した。

C　**バークリー**（1685 〜 1753 年，**アイルランド**）

「**存在するとは知覚されることである**」と述べ，物事は人間の心によって知覚されなければ存在しない，という立場をとった。

※事物の存在の根拠は人間の心の働きにあるとする**唯心論**（ゆいしんろん）。

D　**ヒューム**（1711 〜 76 年，**イギリス**）

帰納法から導かれ発見されたとする因果関係（＝**因果律**）は，その人が習慣として考えるようになった，いわば感じ方の癖（くせ）にすぎない，と考えた。

※原因と結果の間に因果関係などなく，人間は日頃の知覚の蓄積から推論し，そこに因果律があるに違いないと見ているだけで，全ての主張は信念（＝正しいと信じていること）にすぎないという**懐疑論**の立場をとった。主著『人間本性論』。

※知覚した経験の蓄積で世界を認識しているという意味で，人間を「**知覚の束**（たば）」と呼んだ。

３　大陸合理論

①デカルト（1596 〜 1650 年）→近代哲学の父

A　人物

フランスの高級官僚の子として生まれる。大学でスコラ哲学に失望し，旅をしたり軍隊生活を送ったりした。のちに学者として自立，オランダのアムステルダムに定住する。晩年はスウェーデンの女王に招かれてストックホルムに向かい，53歳で死去。主著『**方法序説**』『省察（しょうさつ）』『哲学原理』『**情念論**』。

B　主張

あ　**（大陸）合理論**

経験や感覚は真理を取り違えさせる疑わしいものとして，重視しなかった。人間が生まれながらに備えている**理性・良識〔ボン＝サンス〕**によって，まず疑い得ない真理・原理を見つけ，そこから推論を積み重ねていく過程で得られる知識こそが，真に実用的な知識である，と説いた。

い　**「われ思う，ゆえにわれあり〔コギト＝エルゴ＝スム〕」**

あらゆるものを徹底的に疑っても，なお疑い得ないのは，疑っている自我（＝肉体から独立している精神）が存在している事実である，との結論に達した。

う　**方法的懐疑**

「考える」自我の存在を，最も根本的な真理として哲学の第一原理に位置付けた。

※このように，真理に到達するための方法として，あらゆるものを疑う手法を確立した。

え　**四つの規則**

１　**明証（めいしょう）の規則**

明らか（＝**明晰（めいせき）**）で明確に区別できる（＝**判明**）ものしか受け入れない。

２　**分析の規則**

対象を細分化して，構造を理解する。

３　**総合の規則**

単純なものから複雑なものへと思考を進めていく。

４　**枚挙（まいきょ）の規則**

事例を挙げ，間違いのないように確認して見渡す。

お　**演繹（えんえき）法**

感覚や経験に頼らず，疑い得ない真理から論理的に結論を導こうとす

る方法。

例：全ての人は死ぬ，とすれば（＝確実な真理）→ソクラテスは死んだ，プラトンもアリストテレスも死んだとき（＝実例への適用）→全ての人はソクラテス・プラトン・アリストテレスと同様に死ぬ（＝結論）

か　**物心〔身心〕二元論**

自然界に存在する**物体と精神を区別**して，**物体**の本質は**延長**（＝長さ・広さ・深さなどの空間的**広がり**）をもつことであるとした。**思惟**（しい）が本質である**精神**には延長がなく，この点において物体と明確に区別される。

※**人は生得観念〔本有観念〕をもつ**とし，経験論のロックと反対の立場をとった。

き　**機械論的自然観**の原型

自然界の物体に質的な価値があるように見えるのは人間の主観のせいにすぎず，そこに精神性は全くないとした。

ベーコンの経験論とデカルトの理論は，アプローチこそ異なるが，自然を理解し，支配するために必要な知識を求めるという点で，動機は等しい。これらは一括して**「近代的合理精神」**と呼ぶことができる。

②その他の合理論者

A　**スピノザ**（1632 ～ 77 年，**オランダ**）→ユダヤ系オランダ人

世界の一切は神から必然的に生じるものであり，神と必然的な関係をもっていると唱えた（＝**汎神論**（はんしんろん））。神に由来する自然に偶然はないため，**経験を用いず理性により世界の全ては把握しうる**。彼は，このように事物を**「永遠の相**（そう）**のもとに」**理解したとき，人間は最高の喜びを得られると説いた。主著**『エチカ』**。

※物体と精神を**神による一元論**で合一しようとし，世界はそのまま神である（＝**神即**（すなわち）**自然**）と考えた。しかし，神を自然界から超越した存在として位置付けてきたユダヤ教・キリスト教の立場とは相容（あいい）れず，異端としてユダヤ教会から破門された。

B　**ライプニッツ**（1646 ～ 1716 年，**ドイツ**）

事物の究極的要素は，非物質的で精神的な実体の**モナド〔単子〕**であり，神はあらかじめ無数のモナドの間に調和的秩序が存在するよう定めている（＝神の意思による**予定調和**）と唱え，**『単子論〔モナド論・モナドロジー〕』**を著した。

４　科学革命と進化論

①科学革命

これまで見てきた16～17世紀頃における近代科学・近代哲学の成立期は，「**パラダイム論**」で有名な20世紀の科学史家**トマス＝クーン**（1922～96年，**アメリカ**）や歴史家バターフィールド（1900～79年，イギリス）によって「**科学革命**」（＝科学分野における**パラダイム変換**〔**パラダイム＝シフト**〕**→目的論的自然観から機械論的自然観へ**）と呼ばれた。

②進化論

19世紀の**ダーウィン**（1809～82年）は，自然淘汰（とうた）・適者生存の**生物進化論**を唱え，著書『**種の起源**』はカトリック教会から厳しい攻撃を受けたが，その説を支持する**スペンサー**（1820～1903年，**イギリス**）によって**社会進化論**に発展した。

〈 ***Note*** 〉

第15講　倫理確認テスト

1　『天体〔天球〕の回転について』を著し，地動説を提唱したポーランド人とは？

①　コペルニクス　　②　ガリレイ　　③　ケプラー　　④　ニュートン

2　「知は力なり」は誰の言葉か？

①　ガリレイ　　②　フランシス＝ベーコン

③　デカルト　　④　トマス＝クーン

3　ベーコンのいう「四つのイドラ」のうち，性格・身分・教育などによって事物の本性を取り違えてしまうことを何というか？

①　種族のイドラ　　②　洞窟のイドラ

③　市場のイドラ　　④　劇場のイドラ

4　経験論で用いられる，観察や実験から得られた多くの個別的事実を整理し，その中から一般法則を発見しようとする方法を何というか？

①　問答法　　②　帰納法　　③　演繹法　　④　弁証法

5　本来，人間の心は何も書かれていない白紙〔タブラ＝ラサ〕のようなものである，として，生得観念〔本有観念〕を否定した思想家とは？

①　ベーコン　　②　ホッブズ　　③　ロック　　④　デカルト

6　懐疑論の立場をとり，人間を「知覚の束」と呼んだ思想家とは？

①　モンテーニュ　　②　バークリー　　③　ヒューム　　④　カント

7　物心二元論〔身心二元論〕を唱えたフランスの合理論者とは？

①　デカルト　　②　パスカル

③　ライプニッツ　　④　バターフィールド

8　「神即自然」と考え，汎神論を唱えたスピノザの著書を選べ。

①　『プリンキピア〔自然哲学の数学的原理〕』

②　『ノヴム＝オルガヌム〔新機関〕』

③　『方法序説』

④　『エチカ』

9　神の意思による予定調和を唱え，『単子論〔モナド論〕』を著したドイツの思想家とは？

①　イグナティウス＝ロヨラ　　②　ヒューム

③　バークリー　　④　ライプニッツ

10　社会進化論を唱えたイギリス人学者とは？

①　ベーコン　　②　ロック　　③　ダーウィン　　④　スペンサー

解答

1	①	2	②	3	②	4	②	5	③
6	③	7	①	8	④	9	④	10	④